

神の栄光と人の救い

第4回 人の救いとメシアの関係

はじめに

1. 学びの目的

- (1) 「神のご計画の中心は、神の栄光である」と言われます
- (2) では、神の栄光とは何のことでしょうか。また、神の栄光は、人の救いとどのような関係にあるのでしょうか。

2. 扱うテーマは、次の4つです。

- (1) 天地創造の目的
- (2) サタンの起源と人が造られた目的
- (3) 人の墮落とサタンとの関係
- (4) 人の救いとメシアとの関係

前回までの確認

前回までに3つのテーマを扱いました。そこから導かれた結論に少し補足も加えながら、振り返ってみましょう。

1. 天地創造の目的

- (1) 天地が造られた目的は、神がご自身の住まいとするためです。
- (2) 天地創造の箇所にはそのような記述はありませんが、聖書全体を通して、神がご自身の住まいを人と共に地上に置こうと願っておられることが、分かります。
 - ① エデンの園（創3：8）
 - ② 幕屋（出25：8）
 - ③ エルサレムの神殿（申12：5、1列6：12～13、8：10～13）
 - ④ イエス（ヨハネ1：14） 住まわれた＝幕屋を張られた
 - ⑤ 教会（エペソ2：20～22）、新しいひとりの人（2：15）
 - ⑥ 千年王国（イザヤ62：1～5、65：17～25、エゼ40：1～4、43：2～7、48：35、黙20：1～9）
 - ⑦ 新天新地（黙示録21：1～4、21：10～22：5）

2. サタンの起源

- (1) 最初の地には、宝石で満ちたエデンの園（エゼ28：13）があり、その支配者は天使の長「油注がれた守護者ケルブ」（エゼ28：14）でした。
- (2) その天使の長が、自ら神の地位に着こうと思い高ぶり（イザヤ14：13～14）、悪の起源となりました。この者は、「汚れたものとして神の山から追い出されました」（エゼ28：16）。
- (3) この者が、悪魔、またはサタンと呼ばれる者です（黙示録12：9）。サタンは、天使の三分の一を配下に引き入れました。彼らが、悪霊です（黙示録12：4、エゼ28：16「あなたの商いが繁盛すると」＝あなたが忙しく行き来して交渉すると・・・交

渉の相手方は、悪霊になる天使たち)

- (4) 天使の長がサタンになったときに、地は呪われ、「地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にある」という状態に陥りました(創1:2)。宝石で輝いていたエデンの園も失われました。
3. 人が造られた目的(創1:3~2:25)
- (1) 神は、地を修復されました。そして、地の上に、新しいエデンの園を設け、そこに人を造って置かれました。
 - (2) 神は、人を地の支配者としました(創1:28)。かつての支配者はサタンです。神はサタンに替えて、人を地の支配者としました。
 - (3) このエデンの園には、「見るからに好ましく食べるのに良いすべての木々」が生え、「一つの川が、この園を潤して」いました(創2:9~10)
 - (4) 人は、神に似せて、神のかたちで造られました(創1:26)。「かたち」というヘブル語の原語は、ダニエル2:32でも使われ、そこでは「像」と訳されています。
 - (5) 神のかたちとは、何でしょうか。人はその後、墮落してしまって、本来の人の在り方を失いましたので、創世記からはよくわかりません。預言書などから本来の姿を回復したときの人の姿を見て、ヒントとしました。
 - (6) 黙示録21:22~26では、諸国の王と民が、彼ら自身の栄光を携えて都にやってきます。神が光り輝くお方であるように、人も、本来は、神の栄光を受けて、自らも光り輝く者となるように造られていたと推測されます。ダニエル12:3やマタイ13:43には、人が輝くという預言があります。
 - (7) IIペテロ1:3~4では、神の栄光と徳を受けて、人は神のご性質にあずかる者となると約束されています。栄光は徳を伴います。神の栄光と徳によって、人は内面的にも神に似た者、神の像となります。
 - (8) 神の栄光と人との関係を端的に表現しているのは、次の二つです。
 - ① まことの光(ヨハネ1:9、黙21:23)
 - ② いのちの光(ヨハネ1:3~4、詩36:9)
4. 人の墮落
- (1) 人は本来、神の栄光を受けて、外面的にも内面的にも光り輝く者になるように造られましたが、「神のようになる」(創3:5)というサタンの誘いにかかって、エデンの園での唯一の禁止令を破ってしまいました。
 - (2) 「神のようになる」というのは、かつての天使長がサタンになったときの動機(イザヤ14:14)です。人はその動機をサタンと共有したことになります。最初の人アダムが神の禁止令を破ったときに、聖書では「罪が入った」と表現しています(ロマ5:12)。その結果、人は、神の栄光を受けることができなくなりました(ロマ3:23)。
 - (3) 神の栄光は、人にとって、まことの光、いのちの光ですから、それから離れることは、いのちを失うこととなります。それが死であり、その特徴は「分離」です。分離は三つの段階を経て進行します。従って、聖書では「死」は三つあります。

- ① 神の光からの分離 → 靈的な死 (エペソ 2 : 1)
- ② 靈魂と体との分離 → 肉体の死 (へブル 9 : 27)
- ③ 神からの永遠の分離 → 第二の死 (黙 20 : 12~15)

5. 三つの死とサタンとの関係

(1) 靈的な死とサタンとの関係

- ① サタンの策略で、人は神から命じられていた唯一の禁止令を破りました (Ⅱ コリ 11 : 3)。
- ② そのとき、サタンに由来する「罪」が人の中に入りました (ロマ 5 : 12)。
- ③ 「罪」とは、神に敵対させる「暗やみ」の「力」(エペソ 6 : 12、コリ 1 : 21) です。「自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行おう」とする力です (エペソ 2 : 3)。「私の肉 (からだと情欲) の中に住む」(ロマ 7 : 17~24) と表現されます。
- ④ このような状態の人を、「罪人 (つみびと)」と呼びます (Ⅰ テモテ 1 : 15)。最初の人アダム以降、すべての人はこの状態で生まれてきます。よって、すべての人が罪人です (ロマ 3 : 9~18)
- ⑤ 罪に入られた人は、サタンの支配下に陥りました。いくつかの表現があります。
 - 悪魔の子 ヨハネ 8 : 44
 - 罪の奴隷 ロマ 6 : 16~21、へブル 2 : 15
 - 暗やみの圧制 コロサイ 1 : 13
 - 神の敵 コロサイ 1 : 21
- ⑥ サタンは、地の支配者である人を墮落させて自分の支配下に入れたことにより、地を支配する権威を人から奪うことに成功しました。このときから、サタンは「この世の支配者」(ヨハネ 14 : 30) となりました。
- ⑦ サタンは、「空中の権威を持つ支配者として、今も不従順な子らの中に働いている靈」(エペソ 2 : 2) です。
 - 「空中」というのは、鳥が飛び、私たちが呼吸する空気のある空間です。創世記では「天の大空」(創 1 : 20) といいます。
 - 聖書では、「天」は3つあります。そのため、「神が天と地を創造した」(創 1 : 1) というときの、「天」は原語では複数形です。
 - 鳥が飛ぶ空、大気圏 (創 1 : 20)
 - 太陽、月、星が置かれた宇宙空間 (創 1 : 14、15、17)
 - 神の御座がおかれ、靈的被造物である天使たちがいる異次元の世界 (創 19 : 24、28 : 12)
 - へブル的には、3つの天を区別して、大気圏を第一の天、宇宙空間を第二の天、靈の世界を「第三の天」(Ⅱ コリ 12 : 2) と呼びます。
 - サタンと悪靈は、靈の世界、すなわち第三の天と呼ばれる世界に属する者たちです。
 - 第三の天には、神の御座があります。そしてその周囲には聖なる天使たち

が神に仕えています。

- 同じ天の領域でも、サタンと悪霊たちがいるところを「空中」と表現することにより、サタンや悪霊たちが神の御座から離れていて、しかも地に近いことを示しています。来るべき大患難時代には、サタンは地に落ちると預言されています（黙 12 : 9、イザヤ 14 : 12）
 - 「空中の権威を持つ支配者」とは、サタンや悪霊たちが個々ばらばらで動いているのではなく、サタンをかしらとした国家的組織が存在することを示しています。マタイ 12 : 26 では、まさに「国」と呼んでいます。
 - 「空中」は、鳥が飛ぶ空間、第一の天です。第一の天は地とつながっており、本来は人が支配する領域であり、鳥も地の上のすべての生き物と同様に、人が支配すべき対象でした（創 1 : 28）。サタンが「空中」（第一の天）を支配しているということは、サタンが人を支配下に置き、地の支配権を人から奪っていることを示しています。
 - 鳥は、サタンや悪霊を例えるために用いられることがあります。
 - マタイ 13 : 4 「鳥」、19 「悪い者」 = サタン
 - マタイ 13 : 32 「空の鳥」 = サタンや悪霊たち
- ⑧ サタンは、人がますます情欲のままに生活するように仕向けます（エペソ 4 : 18～19、4 : 22）
- ⑨ 悪霊は、サタンの指揮の下、組織的にそれぞれの担当を決めて活動しています。占いの霊（使徒 16 : 16）、惑わす霊（I テモ 4 : 1）、天使になりすまして天使礼拝をさせる霊（コロ 2 : 18、II コリ 11 : 14）などが聖書には登場します。なお、本物の天使であれば自分を礼拝させません（黙 19 : 10）。
- ⑩ 悪霊の働きの主要目的は、人を神以外のものに依存させることです。占いや偶像崇拝は悪霊によるものです（使徒 16 : 16、I コリ 10 : 20）。
- ⑪ 金持ちになりたがる、金銭を愛することは、サタンの誘惑や悪霊の支配の中に陥りやすい、最も危険なことです（I テモ 6 : 9～10）
- ⑫ 福音宣教のときの留意点（II テモ 2 : 14～25）
- ことばについての論争をしない。これは何の益にもならず、聞いている人を滅ぼす（14 節）
 - 俗悪なむだ話を避ける（16 節）
 - 愚かで、無知な思弁を避ける。それが争いのもとである（23 節）
 - 争ってはいけない。むしろ、すべての人に優しくし、よく教え、よく忍び、反対する人たちを柔和な心で訓戒する（24～25 節）
- ⑬ 終わりの日の困難な時代における人々の状態（II テモ 3 : 1～5）
- (2) 肉体の死とサタンの関係
- ① 罪人はサタンの支配下にあります。彼ら一人ひとりの死の時期を決めるのはサタンです。これが死の力を持つということです（ヘブル 2 : 14）。
 - ② 旧約時代には、神が特別に「垣をめぐらす」とサタンの自由にはなりません

した（(ヨブ 1:10、2:6)。

- ③ 新約時代の信者は、御子の支配下に移されます（コロ 1:13）。その肉体の死の時期を決めるのは、もはやサタンではなく、御子イエス・キリストです。
- ④ もし信者がことさらに重大な罪を犯し続けると、サタンに引き渡されることがあります。その場合、その人の肉体の死の時期を決めるのは、サタンです。しかし、その人が信じたときに受け取った永遠のいのちは失われません。死んだら、その人の靈魂は、ハデス（よみ）ではなく、ほかの信者と同様にパラダイスに行きます。そして、「主の日」には新しい体、主イエス・キリストと同じ復活の体をいただき、神の御国に入ることができます（I コリ 5:5）。
- ⑤ 主の日というのは、3つの意味があります。教会の携挙（I テサ 4:16~17）、そのあとに来る7年の大患難時代（I テサ 5:2）、大患難時代末期のイエス・キリストの再臨（II テサ 1:10）です。新約時代の信者が復活の体をいただけるのは、教会の携挙のときです。

(3) 第二の死とサタンの関係

- ① この段階では、サタンは「この世を支配する者」（ヨハネ 14:30）ではなくなっており、裁かれる立場です。
- ② 大きな白い御座のさばき（いわゆる、最後の審判）の前に、サタンは火の池（ゲヘナ）に投げ込まれます（黙示録 20:10）。
- ③ 神を信じることなく、罪人のままで生涯を終えてハデス（よみ）に落ちていた人々がよみがえって裁きを受け、火の池に投げ込まれます。これが、大きな白い御座のさばきです。私たち信者は、このさばきを受けることはありません。
- ④ サタンと悪霊、そして罪人たちは、永遠に苦しみを受けることになります。
- ⑤ このように、神のご計画では、人の救いだけでなく、サタンと悪霊たちの処罰も、重要な部分です。

6. 今回は、4番目のテーマ「人の救いとメシアの関係」です。

人の救いとメシアの関係

1. アダムと同じ罪を犯していない私たちが罪の中に閉じ込められたのは、なぜ？

ロマ 5:12~21

8頁、資料の表①「転嫁された罪」をご覧ください。

2. メシアであることの三つの条件

(1) 罪のない人生（最初の二つはアダムと同じ、後の二つは異なる）

- ① 罪のない状態で生まれてくる（ルカ 1 : 35）
- ② 悪魔の試み・誘惑を受ける（ルカ 4 : 2、13）
- ③ 罪を犯さない（ヘブル 4 : 15、I ペテロ 2 : 22）
- ④ 律法の要求を満たし、律法を終わらせる（ロマ 10 : 4）

(2) 贖罪の死（その二つの目的と二つの条件）

- ① 目的の一番目：罪人のために死ぬこと（I ペテロ 2 : 24、ロマ 3 : 25～26）
- ② 目的の二番目：天の幕屋を清めること（ヘブル 9 : 11～12、ヨハネ 20 : 17、マタイ 28 : 7～10）
- ③ 条件の一番目：血を流すこと（レビ 17 : 11、マタイ 26 : 28）
- ④ 条件の二番目：木にかけられること（申 21 : 23、ガラ 3 : 13、ヨハネ 3 : 14、民 21 : 7～9）

(3) 復活（4つの証明とひとつの目的）

- ① ダビデ契約の「とこしえの王」であることの証明（I 歴 17 : 11～14、使徒 2 : 29～32）
- ② 無罪であったことの証明（使徒 3 : 13～15）
- ③ 永遠のいのちを与えることの証明（I コリ 15 : 20～23）
- ④ 神の子であることの証明（ロマ 1 : 4）
- ⑤ 復活を信じることで私たちが義と認められるため（ロマ 4 : 16～25）

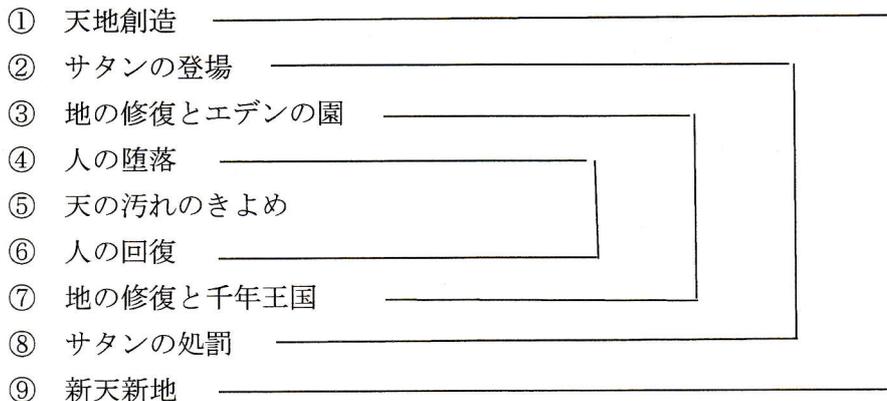
3. 三つの死とメシアの関係

	サタン	メシア
霊的な死	欺く 誘惑する 試みる 罪を入れて人を殺す 【罪は、体に】（ロマ 7 : 23） 妨害する 訴える 暗やみの圧制	愛する（ヨハ 13 : 1、ガラ 2 : 20） 自分を捨てる（ガラ 2 : 20） 贖う（マタ 20 : 28、ロマ 3 : 24） 聖霊を遣わして人を生かす（ロマ 8 : 9～10、コロ 2 : 13） 【聖霊は、心に】（ロマ 7 : 23～25） 助ける〔慰める〕（ヨハネ 14 : 16） とりなす（ロマ 8 : 34） 自由を得させる（ガラ 5 : 1）
肉体の死	ひとりひとりの死の時期を決める （ヘブル 3 : 14）	御子の支配（コロ 1 : 13）
第二の死	火の池へ投げ込まれる	さばき主である（ヨハ 4 : 36、5 : 22、27、ロマ 2 : 16） 信者はさばかれない（ロマ 8 : 1）

4. 人の救いと神の栄光との関係

- (1) どうやって罪人が信仰を持つようになるのでしょうか (ロマ 8 : 29~30)
- ① あらかじめ知っておられた (29)
 - ② 御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められた (29)
 - ③ 召してくださった (30) その2段階 (ヨハ 16 : 8、13)
 - ④ 義と認めてくださった (30)
 - ⑤ 栄光を与えてくださった (30)
- (2) 「御子のかたちと同じ姿に」とは、どういうことでしょうか
- ① 目的は、御子が多くの兄弟たちの中で、長子になるため (29) → 私たちを神の子とするためです。(愛をもって定められた エペソ 1 : 5)
 - ② 御子は、神のかたちです (コロ 1 : 15、ヘブル 1 : 3)
 - ③ 聖霊は私たちの内面を、御子と同じかたちに変えていきます (Ⅱコリ 3 : 18)
 - ④ 私たちが御子と同じかたちになれば、私たちは、神のかたちになります。
 - ⑤ 人が、神のご性質にあずかる者となります (Ⅱペテロ 1 : 4)
 - ⑥ これは、人が本来造られた目的 (創 1 : 27) の回復です。「新しい創造」(ガラ 6 : 15) とも呼ばれます。

(3) 神の計画の進展



5. 結論

- (1) 一人の人によってすべての人が罪人とされたのは、一人の人によってすべての人が救いを受けることができるようになるためです。その救いを受ける条件は、「神がそのように言われたのだから、そのようになる。」と信じることです。
- (2) 人の救いの目的は、人に「神のかたち」を回復させることです。人は神の栄光を受けて、自らも栄光に輝く者となり、その内面も神のご性質にあずかる者となります。こうしてはじめて、人は神と共に住むことができます。
- (3) 新天新地には、神殿はありません。神の栄光が直接、人々を照らします。罪や死、闇がまったくない世界です。
- (4) これは、神の創造のみわざが完成したことを示しています。創造主なる神が、被造物の世界に共に住まい、人が神に仕え、神の栄光をほめたたえます。この状態が、黙示録の新天新地の預言の中心であり、聖書預言の結語です。

資料 表① ロマ 5：12～21 転嫁された罪

節	ひとりの人アダム	ひとりの人イエス・キリスト
A	12	ひとりの人イエス・キリスト
	13	
	14	
	(15～17節は 挿入【B】)	
B	18	ひとりの義の行為によって <u>すべての人</u> が義と認められ、いのちを与えられる (現在) I ヨハネ 2：2 (世全体のための) ヨハネ 3：16～17 (世) と 18 (信者)
	19	ひとりの従順によって <u>多くの人が</u> 義人とされるであろう (未来)
	15	神の恵みとひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、 <u>多くの人に</u> 満ちあふれた (過去)
B	16	恵みの場合は、 <u>多くの違反</u> が義と認められる (現在)
	17	<u>恵みの豊かさ</u> 、そして <u>義の賜物の豊かさ</u> を、いのちにあって受けている人々は、ひとりの人イエス・キリストを通して、 <u>支配するであろう (王となる)</u> (未来)
C	20	しかし、罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれた。
	21	恵みが、永遠のいのちに至らせる義によって、 <u>支配するため</u> である。 恵みが、私たちの主イエス・キリストによって、 <u>支配するため</u> である。